

<書評>

荒井正剛・小林春夫編著『イスラーム／ムスリムをどう教えるか —ステレオタイプからの脱却を目指す異文化理解—』

泉 貴 久*

グローバル化の進む今日、人やモノ、資本や情報の国境を越えた移動はもはや当たり前となり、そのことが私たちの日々の暮らしに大きな影響を及ぼしている。このように「世界の一体化」が進む一方で、気候変動や南北経済格差などの地球的諸課題も深刻化していることは周知の事実である。

ところで、人の移動によってもたらされる諸課題の一つに、移民や難民に関わる諸問題を挙げることができる。出身国における政治的・経済的課題がそれを引き起こす背景・要因として挙げられるとともに、ホスト国における異文化間の対立といった諸課題を連鎖反動的に生み出す結果となっている。具体例を挙げるとするならば、欧米を中心に世界各地で台頭するナショナリズムとそれに伴う「異質な他者」に対する排斥行為は、域内における人々の分断を生み出す結果となっている。新型コロナウイルスの世界規模での感染拡大が進む今日、こうした「内向き指向」はさらに加速化され、国家間、民族間で様々な軋轢が生じることになる。

上述したような文化的な軋轢の中において、顕著な様相を呈するのが宗教に関わる諸問題である。宗教は、思想や価値観などの精神文化に属するが、それが衣食などの物質文化に大きな影響を及ぼすことは言うまでもない。とりわけ、世界三大宗教と呼ばれるキリスト教、仏教、イスラーム教（以下、原音に倣ってイスラーム）は、交易（時には武力制圧）を伴うグローバルな布教活動によって各地に伝播し、世界地図を大きく塗り変えてきた。三大宗教が世界中に多くの信者を獲得し、その後、様々な宗派に分かれていったのは、それらの教義が万人の心をつかむだけの内容で、各地域のおかれた環境に合わせて柔軟に教義を解釈することができたからなのではないかと評者は考える。

もっとも、日本人にとって、キリスト教や仏教のもつ儀礼的なしきたりは、それら両宗教の信者が多く居住する国々との古くからの交流の結果、冠婚葬祭などのイベントに示されるように、人々の生活習慣の中に根づいている。むしろ、信者であるなしにかかわらずである。だが、イスラームについては、マレーシアやインドネシア、サウジアラビアといった信者の多い国々との交流が経済的な側面に偏っている傾向にあることから、身近な存在になっているとは言い難い。また、「ラマダン月における断食」「豚肉の禁食」「飲酒の

禁止」「女性のベール、スカーフ着用」「メッカの方角への一日数回の礼拝」といった日本人にはなじみのない習慣を有することから、それらは偏見の目でとらえられることが多い。さらには、「イスラーム国 (IS)」などの過激派組織のテロ行為がマスコミ報道される度に人々に恐怖感を与え、「野蛮」「好戦的」というマイナスイメージが付きまとう。なかには、「砂漠で生まれた宗教なので、一滴の水を争う。だから中東では戦争が多い」といった誤った考え方も世間に流布している。

こうしたイスラームに対するステレオタイプを突き崩し、その思想や価値観に底流する本質についての正しい理解を得るとともに、近年わが国においても増え続けているムスリム（イスラームの信仰者）との共生を図っていくことは、持続可能な未来社会を構築する上でも不可欠なことといえる。そして、そのことにおいて学校教育は中心的な役割を果たす必要があると評者は考える。なぜなら、学校は未来の社会の担い手を育成する中心的な教育機関であるとともに、地域社会の拠点の一つとして、教育の成果を広く社会に還元していく義務を有するからである。とりわけ、子どもたちと社会との接点を切り結ぶための教科である社会科教育こそ、その中心的な担い手としての役割を果たしていく必要があるだろう。

本書の出版は、その意味においてまさに時宜にかなったものである。本書は、社会科教育学者である荒井正剛とイスラーム学者である小林春夫による共編著で、二人が所属する東京学芸大学における特別開発研究プロジェクトの4年間にわたる研究成果をまとめたものである。そして、新学習指導要領（2021年より中学校にて、22年より高等学校にてそれぞれ実施）が強調する宗教理解の考えに則り、イスラームを切り口に国際理解や異文化理解を推進するための中学・高校における社会科授業のあり方について具体的な実践事例を挙げながら論じており、その目的は以下の二点にある。

- ①イスラームへの一方的な障壁を除去し、差異と共通性の両面から隣人として付き合い語り合うこと。
- ②イスラーム＝異質、怖い、扱いにくいなどの偏見や思い込みを超えて、多面的・対話的な理解を促す授業の提案を目指すこと。

本書は、「はじめに」と「おわりに」を除いて3部

*専修大学松戸高等学校

構成となっている。第Ⅰ部は、2章構成となっており、社会科授業におけるイスラームに関する学習の課題について論じられている。第Ⅱ部は、9章+1トピックの構成となっており、新学習指導要領上のイスラームに関する学習内容とそれに基づいた多岐にわたる授業実践について詳細に取り上げている。第Ⅲ部は、2章構成となっており、社会科教育学の立場からイスラームをはじめとする異文化理解や多文化共生について、歴史教育と地理教育それぞれの観点から論じられている。また、各章には2つのコラムが配置され、イスラーム世界への訪問記、留学生の語り、関連図書の紹介がそれぞれ示されている。

以下、本書の内容構成と執筆者について示しておきたい。ここから、二人の編者の他、東京学芸大学並びに同大学附属学校等の多数の教員が関わった異文化理解のための大型プロジェクトの成果であることを、そして、社会科教育学におけるイスラーム研究としての独自性を有していることを再認識させてくれる。

第Ⅰ部 現状と課題

- 第1章 社会科の授業における課題—生徒・学生のイスラーム認識・イメージ調査と教科書記述から— (荒井正剛)
- 第2章 社会における課題—イスラーム意識調査を踏まえての提言— (小林春夫)
- コラム1 ラマダンは楽しい?—ブルネイでの経験から— (佐々木智章)
- コラム2 ムスリム訪日観光の隆盛と多文化理解 (椿真智子)

第Ⅱ部 授業実践と生徒の反応

- 第3章 新学習指導要領におけるイスラームの学習内容と本書掲載の各実践 (荒井正剛・日高智彦)
- 第4章 ムスリムの思いを通して寛容的な態度を育む授業—中学校地理的分野「世界各地の人々の生活と環境」— (篠塚昭司)
- 第5章 移民・難民問題の視点からイスラームの理解をめざす授業—中学校地理的分野「統合を強めるヨーロッパの国々」— (上園悦史)
- 第6章 イスラーム文化の奥深さと、生徒の生活とのつながりを実感させる授業—中学校歴史的分野「イスラーム文化の国際的役割」— (田崎義久)
- 第7章 マス・メディアの情報を批判的に考察する歴史授業—中学校歴史的分野「アラビアンナイトの世界」 (篠塚昭司)
- 第8章 生徒が共感し、共通性を知ることから、ムスリムとの共生を考える授業—中学校公民的分野 (+総合)「私たちの暮らしと現代社会」— (田崎義久)

第9章 アジアの多様なムスリムを理解する地理授業—高校地理「東南アジアのイスラーム」— (栗山絵理)

コラム3 中国のイスラーム探訪 (栗山絵理)

コラム4 インドのムスリム—歴史と現在— (小林理修)

第10章 多文化共生の状況とその変化を史料から読み取る世界史授業—高校世界史「イスラーム世界とヨーロッパ中世世界の関わり」— (山本勝治)

第11章 科目間連携からムスリムとともに生きる知を探る授業—高校「イスラーム検定をつくり、ムスリムと対話してみよう」 (山北俊太郎・栗山絵理・小太刀知佐・小林理修)

トピック 高校生たちのイスラームへの関心—生徒のイスラームへの関心—生徒のイスラーム研究実践を例に— (廣川みどり)

第Ⅲ部 異文化理解・多文化共生を目指す教育へのヒント

第12章 偏見に向き合う世界史把握の方法—知ることによって自らの偏見に気づき打破するような学習を目指すために— (日高智彦)

第13章 人々・地域をどう取り上げるか—異文化理解の視点から— (荒井正剛)

コラム5 ムスリム留学生の語りから (荒井正剛)

コラム6 教材研究に役立つ書籍 (荒井正剛・小林春夫・小林理修・佐々木智章・日高智彦・山本勝治)

繰り返しになるが、本書は、社会科教育学の立場からのイスラーム研究への足がかりとしての役割を果たすと同時に、イスラームを切り口にした異文化理解、多文化共生を目指した試みとして高く評価される。改めて、編者をはじめとする執筆者の方々へ敬意を表するとともに、社会科教育や国際理解教育等に携わる全ての関係者に是非一読をお勧めしたい。

(明石書店、2020年8月刊、204ページ、2300円+税)